

農業用揚水機と耕地整理法の改正

太田知宏

本稿は、明治期に農業用揚水機が導入されたことで、農政や土地制度に関わる法律に変化が生じたことを論じるものである。

農業生産を向上させることを目的に、1899年に耕地整理法（旧法）は制定された。1905年には耕地整理の事業内容として農業用揚水機の設置を追加するため、耕地整理法にいくつかの変更が加えられた。耕地整理に携わる技術者は、農業用揚水機による開田事業を地主らに奨励した。地主らは耕地整理法に基づいて農業用揚水機を導入することで、大規模な開田を行おうと企図し始めた。開田事業は農業収入の増加や地租の軽減など多くの利益を地主にもたらしたとみられる。しかし、耕地整理法は地租の軽減という法律の特典を有していたため、同法と地租条例との間で摩擦が生じた。

1909年には耕地整理法が改正され、新しい耕地整理法（新法）が制定された。本稿は、新法に対する通説的な法解釈を再検討した。1909年の改正は大地主の要求を反映していると通説的には理解されている。しかし本稿は、旧法と比較すると新法は、土地改良事業に伴う地租軽減の利益を制限していると考察した。言葉を換えると、耕地整理法の改正は大地主の利益を制限したと考えられる。

1909年の法改正は、農業用揚水機が土地改良事業に導入されたことで生じた、耕地整理法と地租条例との矛盾を解消したと本稿は分析した。法改正の結果、耕地整理法は近代日本農業における土地改良事業の基本法に発展したといえる。

近代日本農業における土地改良事業の性格、ひいては近代日本の資本主義の特徴は、技術的な観点から再検討し得るという展望を最後に示した。

「日本帝国」膨張・崩壊期における移動と地域－徳島県名西郡神山町役場文書から－

坂口正彦

本特集では「日本帝国」膨張・崩壊期における人びとの移動を取り上げる。議論の出発点には、移民史・植民史研究が進展するなかにあっても、移民、植民、引揚者、国内移動者、非移動者といった多様な主体の分析、これら主体間の関係性の解明が今後の課題になっているとの問題意識がある。こうした問題意識のもと本特集では1つの地域を対象として、これら主体の多様性・関係性を析出し、これら主体を総体として捉えた場合、いかなる歴史像が導き出せるのかを探った。対象地域は現在の徳島県名西郡神山町である。

各論文の概要は以下の通りである。坂口正彦「戦時山村の移動と家族経営」では戦時を対

象として、農家経営との連関において移動がいかなる意味を持ったのかを検討した。細谷亨「敗戦後の『引揚げ』と生活再建」では、家族を軸として引揚者の生活再建過程を検証するなかで、生活保護、戦後開拓、農地改革などの政策との関連を明らかにした。鄭栄桓「敗戦前後の朝鮮人の移動と定着」は朝鮮人の移動と定着の過程とその意味を、複数の家族の事例をもとに分析した。

以上の各論文によって、本特集がいかなる歴史像を導いたのかを先行研究との差異に注意を払いつつ述べる。まず、近現代日本農村史研究と本特集との関連である。農村史研究では地域における中間団体(町村役場、協同組合、社会運動組織)に焦点を当てる傾向にある。まず、国家と民衆の対抗は中間団体を舞台としてどのように存在していたのかが問われた。加えて、近年になると、中間団体において地域の「公共性」はどのように獲得されたのかが問われるようになった。その際、地域に定住する住民が分析対象になった。これに対して本特集では、「日本帝国」の膨張・崩壊という時代状況、山村、さらには在日朝鮮人非集住地域という条件に規定されつつ、移動と定住を組み合わせながら家族を単位として生存維持をはかるほかなかった人びとの歴史を提示した。

関連して、本特集では中間団体に自らの利害を反映させ難い「雑業層」と呼ばれた人びとの歴史に焦点の1つを当てた。農村「雑業」層を統計的に把握した研究はたしかに存在する。これに対して本特集は戦争、引揚げ、帰還といった巨大な社会変動下における「雑業層」と呼ばれた人びとの歴史を家族という次元から捉え直した。同時に、こうした変動下において家族が一枚岩であったとは限らない点も示した。

さらに本特集を近年における2つの研究成果と接続した。1つは人びとの「労働」・「生活」のすがたを「生存の歴史学」として捉えた大門正克の研究である。「生存の歴史学」の方法の1つは、生存するための人びとの営みと法・制度との関係(矛盾、葛藤)を探るというものである。この方法を引き継ぎ、本特集では「日本人」家族と在日朝鮮人家族とを比較しながら、主体(家族)と制度との関係を戦時・戦後の公的扶助を事例に検討した。もう1つは安岡健一の研究であり、安岡は日本農村を「帝国」という枠から捉え直すことにより、越境する移動者に焦点を当てた。具体的には戦後農村において村を離れていく在日朝鮮人や社会運動家のすがたを描いた。その一方、本特集では越境する移動者である「日本人」引揚者や在日朝鮮人家族が村の非移動者と関係を結びつつ、第2次世界大戦後の地域社会に定着する側面を描いている。

最後に山村研究との関係について述べる。1930-50年代を対象とした山村研究が一定の蓄積を持つなかで、本特集の特質とは山村における兵士の家族、引揚者、在日朝鮮人の存在形態を問うものである。言い換えれば「日本帝国」膨張・崩壊が山村に生きる人びとにいかなる影響を与えたのかを探るものである。